

お坊さんの「生活力」

全曹青広報委員 城市泰紀(石見曹洞宗青年会)

気

づけば同安居のほとんどが結婚をし、披露宴に呼ばれることもめっきり減ってきた。サラリーマンをやっている弟にも先を越され、焦りはないにしろ、毎日のように周りから「結婚」について促される。

私は僧侶でありながら保育園の園長として勤める、いわゆる「兼業僧侶」である。在家の方であれば自分が「生一緒にいたい」と思う相手と結婚というのが理想であろう。私の場合、「自分にとってベストな相手?」「僧侶としてベストな相手?」

「保育園を経営するに当たってベストな相手?」「どれを選べばいいのか随分悩んだ過去がある。実際に交際相手のご両親に「僧侶だから」という理由で交際自体を反対されたこともある。仮に右記3つをすべて満たした自分にとってパーフェクトな相手がいたとしても、相手が婿養子望まなければいけない場合は困難となる。地元の島根県益田市は、人口5万人にも満たない小さな町だ。市内の誰かと交際すれば「ごこの子か」がすぐに噂になり、相手にもストレスを与えることになる。牧歌的な町にありがちな「退屈しのぎ」なのだろう。そのせいだろうか、周りは市外から結婚相手を迎え入れるパターンが多いように感じる。

現

在、石見曹洞宗青年会で実際に活動に参加している人数は10名を切っている。宗務所管内西部の曹青会員でも「専業」の方は1名しかない。ほとんどが副業で生活している状況だ。隣り町には新聞配達をしながら糊口を凌ぐ青年僧もおられる。



僧侶の一人暮らしならともかく、結婚して円満な家庭生活を営むためには、とても「祇園正儀」のようにはいかない。家計を養うある程度の収入も必要だろう。お寺の場合、それを檀務によって賄うことが真つ先に想起されるが、ここに住んでいると、「お寺で食べる」そのこと自体に不安を感じざるを得ない。

全国の曹洞宗寺院の平均年収は565万円といわれる(平成17年 曹洞宗宗勢総合調査報告書)よ

り)。また、厚生労働省の『平成18年 国民生活基礎調査』によると、一般家庭の世帯別の平均所得金額は563万8千円。データだけ見ると、「坊主丸儲け」と揶揄される実態はなく、一般と比べても年収に大差はない、とも感じる。

しかし、あくまでもこのデータは「全国平均」である。実は前述の565万円という数字には「註釈」があって、調査標本となった寺院のうち、約半分は年収300万円に満たないのだ。

この地域の現状について、島根県第一宗務所長の門脇利法老師にお聞きした。

「宗務所管内の西部46ヶ寺のうち14ヶ寺が兼務寺院。1ヶ寺あたりの檀家数が100軒に満たないお寺がほとんどで、中には檀家0軒というお寺もある。兼務寺や無住寺が増える理由の大半は、経済的な困窮から跡取りがいらないため。お寺だけで食べていくのは非常に難しい。このような状況下で子弟や青年僧に『寺を継ぎ、守ってほしい』とは強要し難いことである」。

内

閣府刊行の『平成17年版 国民生活白書』によると、「女性は結婚相手に対して経済力を重視する傾向がある」と報告されている。それが事実なら、ここでは「僧侶(比丘・男僧)の結婚」には不都合な条件ばかり、と暗澹とさせられる。

所長老師は「だからと言って引いてほしくはない。確かにこの地域には若者が少ないが、だから若者の存在価値が高い。その中でボランティア活動などを通じ、地域の人たちと関係を積極的に持つことで世間の僧侶に対するマイナスイメージが変化し、好感・好意の方向に変わってくると思う。(宗門僧侶として結婚する事が必ずしもベストとは思わないが)自らの活動により良縁が引き寄せられることを祈っていることも仰った。確かに、管内東部には「専業」の方ばかりの教区がある。経済的な基盤は西部と大差ないが、頻繁に法要に呼び合うなど互助に努めたり、托鉢をして生計を養っておられるのだ。

今回の投稿で「結婚」について改めて考えさせられた。経済的理由を含めた諸々の言い訳を作り「結婚できない理由」を作っていた気がした。しかし、まだまだ迷走は続きそうである。